

國學院大學學術情報リポジトリ

弥生青銅器祭祀の起源と遼寧青銅器文化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 青樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001963

弥生青銅器祭祀の起源と遼寧青銅器文化

小林 青 樹

要旨

本論では、弥生青銅器5器種（劍・矛・戈・鏡・鐸）の起源について、遼寧青銅器文化に関する最新の成果の概要を示した。その上で、まず遼寧式銅劍に起源する劍を辟邪、男性の象徴と見立てる風習が有柄式磨製石劍となつて、弥生時代前期に北部九州から四国にまで広がり、これが、その後当地域で銅矛・銅劍を中心的に崇拝する原因となつたと考えた。また、前期末から中期初頭に青銅器5器種が列島で揃った背景に、燕国の遼東郡設置以前の東方進出である「燕化」の影響が日本列島にまで及んだことによる可能性を指摘した。

キーワード

弥生時代、青銅器、5器種、遼寧青銅器文化、燕化

1. 本稿の課題

本論の目的は、弥生青銅器祭祀を構成する重要な器物である、劍・矛・戈・鐸・鏡の5器種の起源を検討することによって、弥生青銅器をめぐる日本列島における考古学的事象の解釈を行うものである。ここで問題とする、日本列島における青銅器をめぐる考古学的事象とは、第1に弥生青銅器の形態や使用法、さらには祭祀性などの意味の起源を追及することであり、第2に日本列島における青銅器の分布とその特徴に関する問題である。以上の2つの課題は、個々の青銅器の検討に基づく遺物研究が中心となるが、各起源地と系譜関係を検討し、それら器物を使用する地域集団間の関係、すなわち東北アジアの政治的な動勢にも迫ることができるであろう。

本稿では、近年の弥生青銅器5器種の起源に関する研究を参照しつつ、各器種の概要を整理し、遼寧青銅器文化と一括されてきた地域のなかでの起源地の特定を行う。そして、こうして抽出した地域の問題と、各青銅器の起源に派生する先に挙げた2つの課題に取り組むことにしたい。最初に、地理的な区分について触れておくと、遼西地域は、遼河の西方を意味する区分であるが、厳密には地理的かつ文化的な様相から、ヌルルホ山以西の夏家店上層文化に相当する範囲の地域と、ヌルルホ山以南の大・小凌河流域の十二台営子文化、または魏営子類型にほぼ相当する範囲の地域に分けることができる。そして凌河以東を遼東と一括しておく。

(1) 銅劍の起源

① 遼寧式銅劍の起源と機能

日本と朝鮮半島における銅劍の直接の起源は、遼寧式銅劍である。遼寧式銅劍は、これまでヌルルホ山以西の遼西地域、細かくは内蒙古東部の寧城付近、南山根遺跡や小黑石溝遺跡が候補となっていた（小林 2008b）。しかし、この地域の古相を示す小黑石溝例などの銅劍の詳細な観察を行った結果、ヌルルホ山以西の地域においては、より東方の組み合わせ式の劍柄、身の形状、研ぎ方を客体的に模倣し年代的にも新しいことが明らかになった（春成ほか 2007・小林 2008b）。つまり、これまで遼西地域で遼寧式銅劍が成立すると考える根拠は成立しなくなったのである。こうした状況から、遼寧式銅劍の起源地としてふさわしいのは、遼西地域の大小凌河から遼東湾をはさみ遼東半島一帯が起源地の地となった（図2囲み内）。

遼寧式銅劍の出現年代は、前11世紀から前10世紀初頭頃まで遡る可能性があり、殷後期の青銅鑄造技術が殷系集団によって伝播し、その技術が当地域に受容されて成立したと考える。また、遼東から朝鮮半島では、磨製石劍も存在し、早くから武器の主流は劍であった。

こうした遼寧式銅劍は当初から短劍のみである。これに対して、ヌルルホ山以西の地域では長劍と短劍のセットからなり、車馬や騎馬での戦いのために長短を併せ持っていた。遊牧民にとっては、馬上か

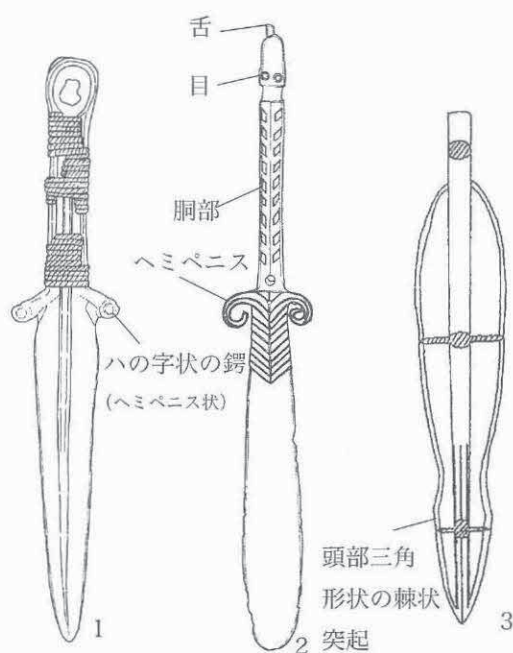


図1 出現期銅剣・銅匕首における蛇の表現
(1 朱開溝 2 内蒙古博物館蔵 3 双房 M6)

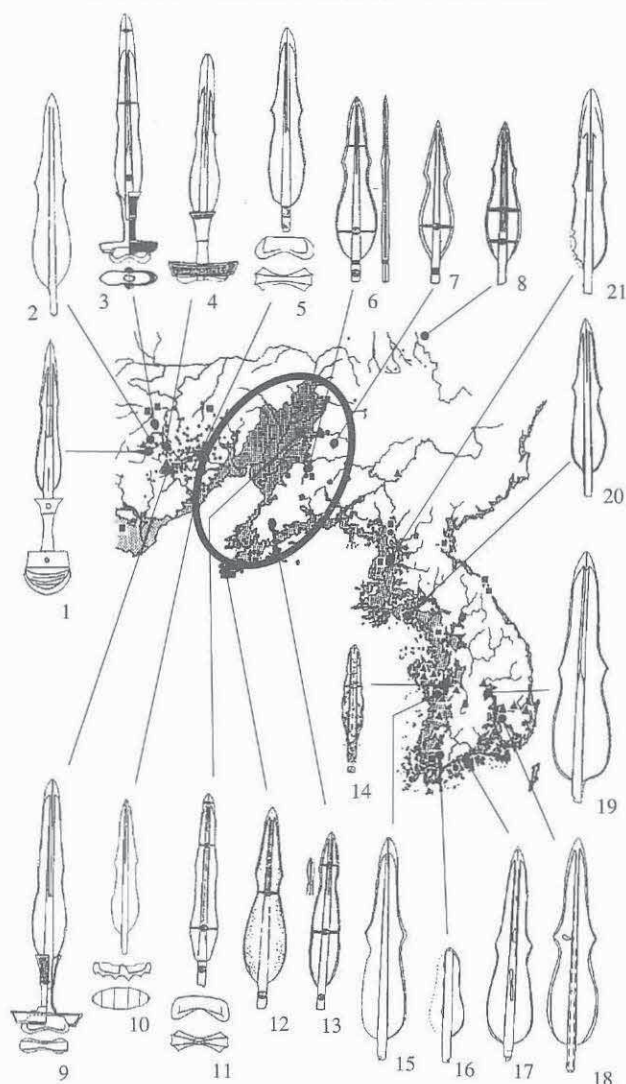


図2 遼寧式銅剣の分布 (岡内 2004 を改変)

ら刺す武器と、落馬後などににとどめを刺す機能が重要であったわけである。そのため、棘状の突起は発達しなかった。これに対して、より東方の遼寧式銅剣の起源地では、車馬と騎馬がないために接近戦で確実にしとめる必要性があり、棘状突起を発達させた。それに伴い、刺さった剣を引き抜くにあたり、柄を「T」字状にして引き抜きやすくしたのであろう。特に、遼東地域にみられる初期の遼寧式銅剣の曲刃、棘状突起部分は、鋭角的な三角状に外側に張り出し殺傷能力はより高い。こうした短剣は、石棺墓では遺体の右側から出土することが多いので、握り方は「逆手」である。実戦では、接近戦の組み手などで、留めをさす武器として使用されたとみる。

こうした、初期の遼寧式銅剣については、以上のような機能的な見方ができるが、象徴的な側面も併せ持っていることを次に示したい。

② 遼寧式銅剣と蛇剣信仰

筆者は、遼寧式銅剣をはじめとする、中国北方系の短剣は、蛇を象徴化した「蛇剣」であり、こうした表象のあり方が、剣の出現段階から存在していた可能性を考えている (小林 2008c)。こうした可能性を考えたきっかけは、東アジア最古の短剣にある。

東アジア最古の短剣は内蒙古の朱開溝遺跡 (殷代二里崗期併行) の銅剣であり、剣の鐔付近は先端部が丸く、「ハ」の字に開くのが特徴である (図1-1)。この部分は、剣の鐔の位置に相当する部分に取り付くが、いわゆる鐔的な機能は全くなさない。つまり、装飾的な機能しかもたないと考えたほうがよいであろう。そうすると、この部分の装飾の起源は何であろうか。筆者がこの装飾の候補として最も相応しいと考えるのは、蛇のペニスである。

蛇のペニスは、一対のヘミペニスと呼ばれる部分からなり、このヘミペニス (半陰茎) は、普段は総排泄孔から尾に寄った部分に収納されており、交尾時のみに外部へ出てくる。また、ヘミペニスは上に向かって広がるので、剣先端側が頭部に相当することになる。当地域では、朱開溝例に近い時期の李家崖文化段階に、鐔部分に相当する位置にヘミペニスをリアルに表現している蛇匕首 (図1-2) までが存在しており、このようなものが同じように中国北方地域に存在していたことを考えれば、朱開溝例の鐔部分が蛇のペニスを表している可能性は高い

であろう。こうしたありかたは、中国北方地域でも内蒙古地域側の現象であるが、蛇剣信仰の体系はさらに東方にまで広がっており、遼寧式銅剣自体にも影響したと考える。

遼寧式銅剣の起源と考える遼東の双房遺跡 M6 出土の銅剣（図 1-3）（西周初期頃）は、棘状突起が剣先の方についており、頭部三角形をなす。この短剣の形状は、蛇を表象としているとすれば、おそらくマムシ（サンガクマムシ）を連想させる頭部三角形の形状とみるべきであろう。朱開溝の銅剣が出現以降、東方の地域では柄を身と一緒に铸造しない短剣文化圏であり、鏑以下を省略して剣身自体を蛇の表象とするにあたり、このような形状が創出されたと考える。また、この頭部三角形の短剣の形状は、先の検討のように殺傷能力を高めるという機能的な面を迫及した結果でもあった。しかし、最も重要であったのは、どうやら蛇剣信仰の表象としての象徴的な形状にあったようである。

このように考える理由は、その後の遼寧式銅剣の形状変化にある。遼寧式銅剣の最大の特徴である棘状突起は、出現して以降、早い段階にその位置が下がる。その後、朝鮮半島に伝播して以降の細形銅剣は、全体に細身化が進行し、棘状突起の位置が下がりつつ、関が逆「ハ」の字形化して、この部分も棘状をなすようになる。ただし、遼寧式銅剣の基本的特徴は退化しつつも維持している。そして、日本列島に伝播して後、脊柱、樋、棘状突起は退化しつつも、平形銅剣のような最終段階まで維持されている点は興味深く、同時期の中国式銅剣のような直刃とは全く異なる意味がその形状にあったのであろう。韓国と日本での変遷を見ても、棘状突起部分が銅剣のアイデンティティーを表象し、蛇剣信仰の系譜を引いている可能性はあろう。東北アジアの遼寧式銅剣に起源する銅剣は、儀器化しつつも、遠古の形状とその意味を喪失しなかったと理解する。

このように、剣は出現段階から蛇を象徴として成立した。朱開溝の銅剣は、繁殖期の攻撃的な状態のオスの蛇（おそらくサンガクマムシ）を表象としたものであろうし、オスであることから男性格となるのは明白で、マムシの頭部三角形は「男根」の表象ともなったであろう。神話で描かれるような剣に関わる「男神」「戦神」の象徴の起源は、こうした剣

にまつわる諸特徴相互の比喩的有縁性（連想）から派生したと考えるべきである。また、蛇は、猛毒で敵を倒すことから、辟邪の象徴でもあり、武器である剣の表象となったとも考えておきたい。

こうして、ユーラシアに広がる北方系遊牧民の間では、剣は天を突き上げる様から男性のシンボルと見なされ、男性神の崇拝の対象物となっていたのであろう。所謂、「男根崇拜（ファロセントリズム）」のシンボリック的存在となり、朝鮮半島では支石墓の蓋石などに石剣の岩刻画が描かれ、なかには女性のシンボル画とも並べて描かれることがあるので、朝鮮半島でも剣は男性のシンボルとみなされていた可能性が高い。日本列島にもこうした祭祀性が伝播していると考えてよいであろう（小林 2007）。また、遼西から遼東の一帯、そして朝鮮半島では、遼寧式銅剣を早くから広域に保持していたが、遼寧式銅剣の棘状突起や三角形を意識した形状や棘状突起をもつデザインは、当地域において銅矛と銅戈にも引き継がれ、剣にはじまる蛇の表象とその意味は他の武器にも及んでいたようである。このように、遼寧青銅器文化では、遼寧式銅剣が集団のアイデンティティーに関わる象徴的伝統を表象する器物であり、この特徴が朝鮮の細形銅剣に変容し、日本列島に伝播したのである。

(2) 銅矛の起源

遼寧式銅剣が遼西から遼東、そして朝鮮半島という広域な分布圏を形成するのに対して、遼寧式銅矛は遼東から朝鮮半島に集中分布し、遼西にはほとんど分布しない。宮本一夫と宮里修の集成によると、遼西では 2 点、遼北で 6 点、遼南で 1 点、鴨緑江流域 6 点、松花江流域 8 点、朝鮮半島 17 点となり、大・小凌河以東に圧倒的に多く存在する（宮本 2002、宮里 2007、宮本 2008）。このような地域性となった背景には、元々、沿海州のシネガイ文化や吉長地区の西団山文化、そして朝鮮半島一帯が、石槍、もしくは石矛などの矛類が卓越する文化圏に含まれることによる（大貫 1999）。おそらく、狩猟用の槍が起源となったことに原因があろう。これに対して、燕では春秋から戦国前半頃の場合、小形の矛が主で、銅戈を装着した柄の先端部分と一緒に装着されて戟として使用され、前 3 世紀段階に大形の矛が増加する。

こうした遼寧から朝鮮半島の銅矛は、筒柄をもつものの、身の形態は遼寧式銅剣をベースにしたもので、遼寧式銅矛と呼ばれる（図3）。朝鮮の遼寧式銅矛は、筒柄部に縦に切れ込みが入るのが特徴で、これは遼東の銅矛では主流ではない。筒柄を正面から見て左右の横方向から目釘穴である穿があげられており、後にこの付近に耳環がつくようになる。穿のみのタイプは、異形青銅器が副葬される朝鮮青銅器の段階からあり、西北朝鮮の丁峰里遺跡で無耳無節帯の最古式の銅矛がみられる（宮里 2007b）。型式学的に新しいものには、筒柄の末端部に節帯がめぐり、徐々にこの節帯の条数が増加していくというのが、これまでの研究における変遷の見方である。このような銅矛の要素における、節帯の成立、側面方向の切れ込み、側面からの穿、以上の要素がどこに起源があるのかについてはよくわからない。

かつて、朝鮮式銅矛の成立については、近藤喬一により燕の銅矛の関係が論じられ、これが通説となっていた（近藤 1969）。これに対して、宮里修は遼寧式銅矛からの変化を想定し（宮里 2007b）、最近、宮本一夫も基本的にこの宮里の考えを基本的に

支持している（宮本 2008）。筒柄部への側面穿孔は、確かに遼寧式銅矛の特徴であるし、また、かつて棘状突起であった三角形の曲刃部のなごりである三角形の関に接続する翼部分も同様に遼寧式銅矛の特徴を踏襲している。また、燕の銅矛と朝鮮半島の銅矛とを比較した場合、たとえば耳環を例にとれば、燕の銅矛では側面ではなく正面側に穿と耳環がつき、朝鮮半島のものとは全く様相が異なる。ただし、節帯と耳環の系譜については、朝鮮半島で自生したと考えるにはまだ問題がある。

宮本一夫は、節帯について、定型化した細形銅矛のうち宮本分類の D1b 式とした炭坊洞遺跡例の銚部（筒柄部）下端に、かすかな節帯が認められ、これは銚部における外范と内范を固定するはばき部分が発達したものと考え、その年代を前 5 世紀から前 4 世紀頃とした（宮本 2008）。節帯の出自が宮本の言う通りに、はばき部分の発達であったとしても、耳環の出自の説明にはなりえない。むしろ、耳環の存在を考慮するならば、節帯と耳環の両方は本来セットでどこかに存在し、その影響で節帯部分のみを先に受容し、その後、両方を受容したものが出現した可能性も考えなければならない。それでは、節帯と耳環の出自はどこに求められるのであろうか。

実は、この節帯と耳環の起源に関しては、日本列島の初期の銅矛が鍵となる。吉田広によれば、日本の初期の細形銅矛は、耳環と節帯をもつ小形品が多く、逆に朝鮮半島の細形銅矛では、このタイプは少なく、日本の初現型の銅矛は日本産である可能性を指摘した（吉田 2008）。吉田は、この論考のなかで、あえて節帯と耳環の出自については触れていないが、本来、青銅器が存在しない日本列島に節帯と耳環があったはずはないであろうから、そうすると日本と朝鮮以外にその出自を求める必要がある。先に、燕の銅矛との関係について、穿と耳環の位置に関して朝鮮の銅矛のそれとの対比で相違する点を指摘した。朝鮮半島でこの位置関係が移動したと考えれば、燕系の可能性もなくはないが、燕の影響を受ける遼西地域にその候補となる資料がある。

遼西の凌源三官甸子河湯溝 M7401 からは、南洞溝銅剣段階（前 6 世紀前後から前 5 世紀初頭頃）の耳環と節帯をもつ銅矛があり（靳 1983）（図3の左上囲み内）、極めて少ない資料ではあるが、耳環と

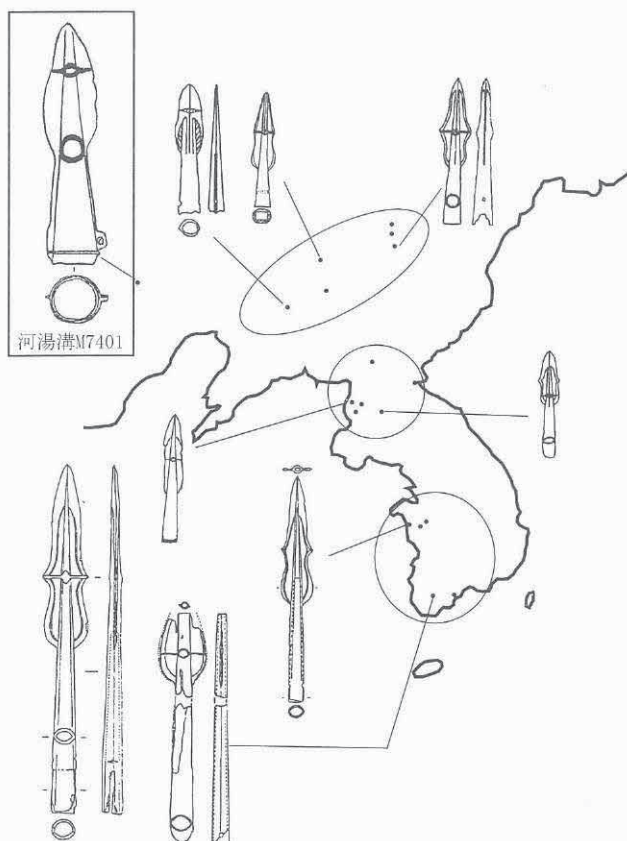


図3 遼寧式銅矛の分布

節帯は遼西の影響による可能性が高い。本例を筆者は「遼西式銅矛」と呼ぶことにする。

このような状況からみて、朝鮮半島では、先に触れた吉田の指摘（吉田 2008）通り、節帯や耳環をもつ古相の銅矛は数が少なく、穿孔のみをもつものの存在から、遼東地域の遼寧式銅矛が起源であり、日本列島の初期の銅矛は、この朝鮮半島の遼寧式銅矛に起源する銅矛の要素と、遼西式銅矛の耳環と節帯の要素の影響の両方が融合した可能性を考える必要がある。朝鮮半島では、銅矛における前段階の在地的な遼寧式銅矛の影響が強く、遼西の影響は客体的でわずかであったが、日本列島の場合は、製作開始にあたって遼西の伝統が強く反映したといえる。河湯溝 M7401 例の時期である南洞溝銅剣段階（前 6

世紀前後から前 5 世紀初頭頃）は、燕の遼西地域への間接支配時期に相当し、遼西地域が燕化していく時期（宮本 2000・2007）と呼応しており、日本列島にもこの燕化の流れの影響があった可能性がある。

(3) 銅戈の起源

朝鮮半島と日本の銅戈の起源について、これまで具体的な形状の細部や研ぎ方などの起源について論じたものはなかった。こうしたなか、筆者等の遼寧地域における調査によって、遼西地域に祖型と考える銅戈が存在することが判明し、「遼西式銅戈」と名付けた（小林他 2007、小林 2008b）。いまのところ、遼西式銅戈の分布は遼西地域に限られる。

遼西式銅戈は、遼寧式銅剣をベースに、中原系の中国式銅戈の特徴を念頭におきつつ、遼西地域で独自に開発されたものである。研ぎのあり方なども遼寧式銅剣と連動した「異器種間交流」（小林 2008b）によって作られている。本体の主要部分は銅剣そのもので、中国式銅剣の胡に対応するものとして、三角形に上下に大きく開く翼状の胡を取り付けている（図 4）。ある程度、中原の銅戈の影響はあるけれども、全体の形状は全く異なるといってよく、独自の銅戈を生成した。遼西式銅戈は、15cm 程度の小形品であり、中国式銅戈と同様に、長兵（長い柄にとりつけて使用する兵器）用として車馬や騎馬用に開発された。刃こぼれの状態から、着柄状態は図 5 のように推定する。遼西式銅戈は、中国式銅戈のように長い「胡」と「内」を持たないため、「蘭」の部分幅を広くし（この部分を「補助蘭」と名付ける）、さらに身の中央に遼寧式銅剣と同じ「脊柱」をもつため、「内」の側から蘭をみると木の葉形を呈する（図 5 右）。筆者は、この部分を「固定蘭」とする。木の葉形の補助蘭の形態は、朝鮮式銅戈とも類似し、朝鮮式銅戈から遼西式銅戈へ変化するに際し、補助蘭部分は断面形状が「T」字形から三角形に退化する。こうした特徴の変化からみて、遼西式銅戈は朝鮮式銅戈の祖型として相応しいと考える。

ただし、遼西式銅戈に比べて、朝鮮式銅戈は約 1.5 倍に大形化し、形も変容していることから筆者の見解には異論もある。しかし、こうした大小の差は地理的・地形的な差異によるものであろう。遼西地域では長兵用のため小形品であったのに対して、遼西

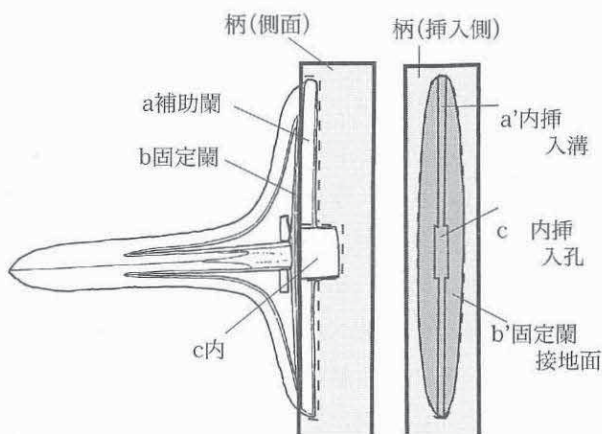


図 4 遼西式銅戈の着柄状態の復元模式図

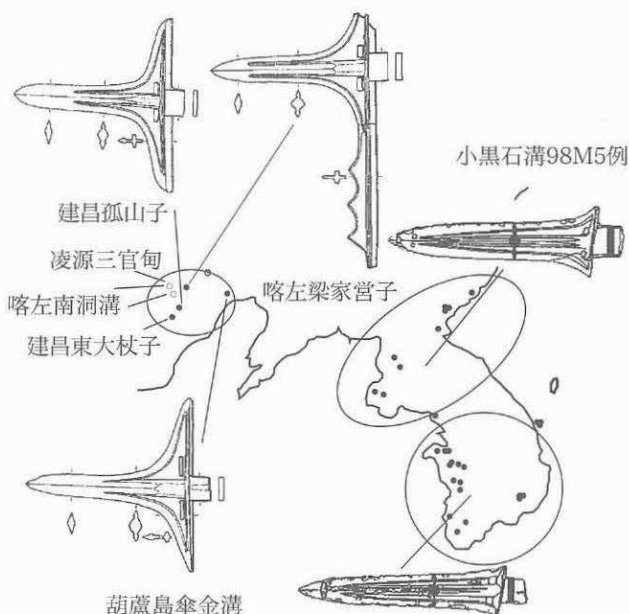


図 5 遼西式銅戈と朝鮮式銅戈の分布（図は 0.13% 縮小）

より東方は、大・小凌河流域は広大な湿地で、また遼東は山がちであり、さらに朝鮮半島は平野がせまく河川が豊富な土地であるので、車馬や騎馬は戦いにむかず、歩兵主体の戦闘であったことから短兵用で大形品が必要となった(図5)。なぜ短兵用(短い柄)の場合に大形化するのかといえば、短い柄に小形の銅戈では威力に欠け、破損しやすいためであるからと考える。また、こうした大形化にともなって、上下に大きく開く翼状の胡は邪魔になったために縮小したのであろう。筆者は、遼西式銅戈から朝鮮式銅戈への変化をこのように説明する。また、遼西式銅戈は、銅剣と密接な関係にあり、製作者も同一であったと想定する。これと同じことが朝鮮半島でもあったならば、朝鮮の細形銅剣は細身が基調であり、銅戈も細身化したと考えた方がよいであろう。遼西から朝鮮に銅戈が伝播し、大形化と形状が大きく変わったようにみえるのは、以上のような背景による。

朝鮮式銅戈は、これまで1式銅戈として一括され、細分は難しいとされ、年代も新しく見積もられてきた。しかし、遼西式銅戈の特徴と比較した場合、朝鮮式銅戈1式は明確に細分ができる(小林2008b)。ここで、細分できる根拠を一つだけ挙げれば、遼西式銅戈の場合、蘭末端部分まで研ぎが及んでおり、朝鮮式銅戈でもこれと同種のものが古く、研がれなくなった蘭が外側に突出するものほど新しい。この観点でみれば、後藤直が朝鮮式銅戈の最新の集成で示した資料(後藤2007)のうち、北朝鮮の貞柏里例は最も新しく日本では中細形的で、前3世紀後半頃の河北省の辛庄頭30号墓例も新しい部類にはいる。これに対して、北朝鮮の九月山下例や石巖里例のように刃部が援から蘭をも通してつけられているものは、遼西式銅戈的で古い。

遼西式銅戈の年代については、いまのところ最古のものは、建昌県の東大杖子遺跡例が前6世紀前後、同県の孤山子遺跡例が前5世紀前半から中葉ころとなっている。遼西地域では、遼寧式銅剣の最末期の年代は、前4世紀前半頃であり、銅戈と銅剣は形状や研ぎ方が非常に類似していることから、「異器種間交流」が存在し、同一製作者集団によって製作されている可能性が高いので、この段階に遼西では遼寧式銅剣はなくなってしまうことからすれば遼西式銅戈の遼西地域における下限年代も前4世紀前

半に設定できる。これによって、朝鮮式銅戈の成立年代もほぼ前4世紀前半頃に設定できる。このように、遼西式銅戈は、中原系の要素と遼寧式銅剣文化の双方の融合によって創出された武器であり、前6世紀以降におけるこの武器の誕生は遼西地域における車馬と騎馬の本格的な導入をも意味している。宮本一夫は、この段階に遼西地域に燕系の礼器が存在し、燕の影響力が強まることを「燕化」と表現した(宮本2007)。この現象は、遼寧式銅剣文化圏が燕によって変容していく過程を示している。

ここで注目されるのは、銅戈の祭祀性である。銅戈は、殷代より辟邪の祭祀的機能を持ち、不安定な状態を安定した状態にすることを期待された武器である(小林2006a・2006b)。この機能は祖先祭祀を中心とし、農業を軸とする年中行事では豊作祈願で発揮され、戦勝祈願、洪水虫害などの災害回避といった臨機的な場面においても機能した。このような機能は、弥生絵画に描かれている内容にも継承されており、銅戈のデザインなどは遼寧式銅剣文化側で変容されてはいるが、遼西を介して銅戈の祭祀的な意味は朝鮮半島を経由し、日本列島にまで到達した。ここで注目するのは、朝鮮半島において青銅器埋納では銅戈は極めて少数派であり、日本とは対照的な点である。銅戈は、朝鮮半島で誕生して、あまり時間差なく日本列島に到達した可能性が高いので、あるいは、遼西地域で熟成された銅戈の祭祀性が早い段階で伝播し、朝鮮半島とは多少異なった道筋をたどった可能性を考えたい。

(4) 多鈕鏡の起源

① 単鈕鏡から多鈕鏡へ

日本で最初にみられる銅鏡は、多鈕鏡である。甲元眞之は、東北アジアの単鈕鏡を検討するなかで、多鈕鏡の来歴についてシャーマンの持ちものであったと考えられる殷墟出土の単鈕素紋鏡と夏家店上層文化の凹面の単鈕鏡の系譜を引く可能性を指摘した(甲元2006)。遼西側の内モンゴや河北省などからは、実際に殷墟出土のものと同種の単鈕素紋鏡が出土しており、当地域で凹面の単鈕鏡と融合して形成された可能性は高い。

今のところ、こうした系譜を引く最古段階の多鈕鏡はヌルルホ山以西の寧城小黑石溝遺跡98M5墓

から出土している鏡である（図6-1）（内蒙古文物研他2007）。小黒石溝例は、出土状態から見る限り、非常に厚い大形鏡であることがわかり、この墓の内部から出土している青銅容器は、在地の四足土器を模倣したものを含み、剣は北方系のものをもつ（塔拉2006）。西周末から春秋初期の頃のものであろう。本資料を現状での最古例とする限りにおいて、多鈕鏡はヌルホ山以西の夏家店上層文化で出現したことになる。

② 多鈕鏡の変遷

以下、多鈕鏡について、文様に注目した変遷の要点を提示する（図6）。多鈕鏡文様の起源は、ヌルホ山以西の夏家店上層文化でみられる連鑄式銅製剣鞘の本体表面に入れられた、「三角形透かし文様」であろう（小林2008c）。この「三角形透かし文様」は、西周後半頃に小黒石溝例のような「三角文系連続Z字文」（図6-2～7）に変形した。「三角文系連続Z字文」とは、三角形を上下左右に反転させながら交互に配置したあとに形成された空白部分のネガティブな文様である。遼寧式銅剣2式段階頃になると、この「三角文系連続Z字文」は剣鞘の鞘尻や剣柄に施され、剣にかかわるものに多用される。

「三角文系連続Z字文」は、多条で斜走するものが古相で（図6-1～5）、新相は横走り条数が少なくなる（図6-7）。後者は、前6世紀から5世紀初頭頃と考えるが、この段階のものが朝鮮半島に伝播し、伝成川例（図6-10）のような星形の図形に変形する。遼東では、戦国段階に剣柄の「連続Z字文」が急激に変容してしまうが、多鈕鏡の文様も大きく変貌する。伝成川例の星形図形は、一見すると単なる星形に見えるが、下側の図形（「連続Z字文」）を引いたあと、上部に2本線を追加して全体を星形的にしたものであった。星形的図形のなかには「連続Z字文」が隠れていたものであり、鄭家窪子例（図6-7）からは近い時期に派生した文様の可能性が高い。この星形的図形の形成により、周囲と星形図形内にくまなく三角形を配置した文様が創出され、「鋸歯文」が成立した。この鋸歯文は、多鈕細文鏡段階に日本列島に伝播し、銅鐸などに引き継がれた文様である。

多鈕鏡はシャーマンの頭部や胸にかけられ、死後は頭部付近に置かれていることから、頭部を光で照らし悪霊を取り払うよう機能した可能性が高い。朝鮮半島では、こうした多鈕鏡と銅鐸の起源となる銅

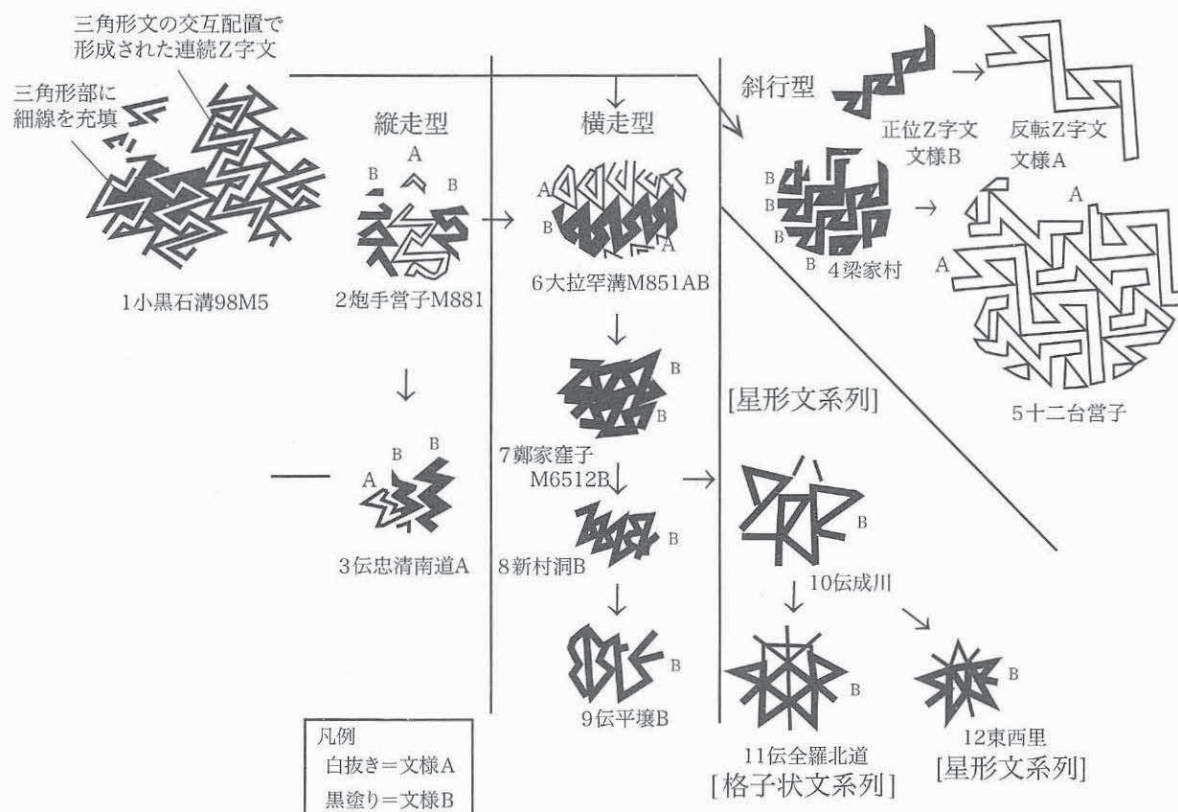


図6 多鈕鏡文様の変遷

鈴がシャーマンの体に取り付けられて儀式で使用されたと見られており、日本列島では多鈕鏡が姿を消した後、銅鐸に多鈕鏡の鋸歯文が引き継がれた。

③ 「三角文系連続 Z 字文」の象徴性

多鈕鏡の「三角文系連続 Z 字文」が出現して以降、「三角文系連続 Z 字文」は多鈕鏡以外の青銅器にも施文された（小林 2008c）。たとえば、鄭家窪子遺跡 6512 号墓からは、鞘尻状の銅剣装具に多鈕鏡と同種の連続 Z 字文が施されたものが 3 点出土している。また、同遺跡の第 1 地点出土の銅剣の剣柄にも施されており、さらに土器の胴部文様（第 3 地点出土例）にも及び、異形青銅器であるラップ形銅器の細い筒状部の透かし文様も、「三角文系連続 Z 字文」の系譜にあり、様々な器物を飾る重要な文様であった。このようなあり方から、「三角文系連続 Z 字文」が集団のアイデンティティーの象徴、すなわち遼寧式銅剣文化の象徴的な文様であったと理解した方が良いであろう。

(5) 銅鐸の起源

銅鐸の起源は、銅鈴にあるという見方はほぼ通説となっている（春成 1994・2008）。中国北方地域で銅鈴を細かくみると、大きく 2 種類に分けることができる。第 1 類は大きくても 5cm 程度の小形品で、紡錘形をなすものが多く、身に長方形の透かしなどをもつものもある。第 2 類は、15cm 以上の大きさで、身は無文をなし、なかには身の下線が丸みをもった「へ」字状に窪む。これらはしっかりとした舌をもち、なかには内面突帯をもつものもある。日本の銅鐸の直前段階の祖型は朝鮮式銅鐸（銅鈴）にあるが、その最古例は槐亭洞遺跡例である。この段階の青銅器は、異形青銅器を含む朝鮮半島での細形銅剣出現期で、この段階を遼東の前 6 世紀頃の鄭家窪子遺跡段階にあてる研究者は多い（岡内 2004 ほか）。

これに対して、遼東以西の地域における銅鈴をみると、先に分類した 2 類のうち第 1 類は、殷末西周初め頃の段階に山西省から河北省付近にまでみられ、また、第 2 類もわずかにみられる。河北省琉璃河遺跡では、第 1 類の紡錘形の小型銅鈴の他に、窓枠状の凹みをもつ小型銅鈴があり、前者は中原系の鐘の系譜に類似する。後者は北方系の身につける銅鈴であり、左大腿骨付近から出土することが多く、腰

付近からかけていた可能性が高い。また、埋葬の際には、頭部や棺の上などに置かれており、悪霊を音でもって鎮めるような機能があった可能性があろう。西周段階にも 2 類は存続し、さらに春秋段階にはいつてからも、河北省の軍都山遺跡の墳墓群をみるかぎり、北方系集団は銅鈴を保持していたことがわかる。しかし、銅鐸の起源となる可能性の高い 2 類については、春秋末までの期間、遼西と遼東での様相は不明である。ただし、前 5 世紀頃の遼西の三官甸遺跡では、多数の銅鈴が出土しており、中形品から大形品まで数多く出土している。また、身の下線が丸みをもった「へ」字状に窪む特徴をもち、同時期の中原でみられる鐘類の影響によって形成された可能性もあろう。その他にも遼西には 2 類が存在しているようであり、銅鈴の起源は北方系の影響を受ける遼西地域であるところでは考えておきたい。

2. 結論

(1) 起源地の検討

以上、ここまで概観してきた青銅器 5 器種の起源と系譜関係は、次のように整理できる（図 7）。

- ① 遼寧式銅剣は、前 11 世紀頃から前 10 世紀初頭頃に大・小凌河流域の遼西から遼東半島までの一帯で出現し、その後ヌルルホ山以西や遼東東北、さらに朝鮮半島にまで伝播（破片となって北部九州にまで伝播）し、広大な遼寧式銅剣文化を形成した。この文化圏は、前 4 世紀前半に遼西では終焉を迎え、前 4 世紀後半に遼東で終わる。
- ② 遼寧式銅矛は、遼東起源で、朝鮮半島にまで分布を広げた。大・小凌河流域より西に伝播したのはわずか 1 点のみである。朝鮮半島では、遼寧式銅矛の形状の特徴をベースに、わずかに遼西の節帯と耳環を受容したが、このタイプは朝鮮半島の初期には少数派で、むしろ日本列島のほうが多く、日本産の可能性がある。この日本産の成立については、朝鮮半島と遼西両地域の影響が融合したものと考えた。
- ③ 遼西式銅戈は、前 6 世紀頃、遼西で成立した。中原系の銅戈の影響をうけつつも、遼寧式銅剣をベースに創出され、前 4 世紀前半頃には遼西地域ではみられなくなる。

- ④ 多鈕鏡は、殷系と北方系の融合により、ヌルルホ山以西で成立し、ほどなく遼西に拡散する。星形文の成立は朝鮮半島北部で前6～5世紀頃である。銅鈴も同様な動きをしていると想定する。
- ⑤ 青銅器5器種は、朝鮮半島西南部の忠清南道地域を中心に、前4世紀前半頃に5点セットすべてが揃う。朝鮮半島を経由して日本列島へ到達するのは、この青銅器5器種がすべてそろったことが前提であり、その年代は前4世紀前半でもおかしくはない。

以上のように、弥生青銅祭器を構成する青銅器5器種の起源は、大きく遼寧青銅文化と一括されてきたが、起源地とその系譜には大きな違いがあった。この大きな違いは、地理的には、大・小凌河流域が広大な湿地帯を形成し、さらに東では遼東が山がちであったことによって、中原系または西北系の文化要素が容易に及ぶことができなかったことに起因する。そのため、車馬具や騎馬関係起源の青銅器は、遼東から朝鮮半島で変容し、一部が伝播して異形青銅器となり、日本列島には異形青銅器は伝播しなかった。銅戈の東方への伝播が遅れたのも、同じ理由による。そして、最も祭祀的なランクが上位である青銅容器を中心とする礼器は遼西止まりで東方へは全く伝播しなかった。このように弥生青銅器の

起源地については、ほぼ特定ができたわけであるが、それでは、こうした結果がどのように日本列島の青銅器の受容にあたり影響を与えたのであろうか。

(2) 派生する問題

日本列島における初期の大陸系青銅器文化の影響は、おそらく弥生時代前期前半段階と弥生時代前期末から中期初頭段階の大きく2つの段階に画期であろう。前者の第1の段階は、僅かに1点遼寧式銅剣の破片の流入があるものの、朝鮮半島で遼寧式銅剣を模倣して形成された有柄式磨製石剣が流入する。分布は、北部九州を中心に、四国にまで広がる。

先述のように、剣は辟邪の象徴的器物としての側面をもっていた。朝鮮半島では、青銅器文化の古い段階から遼寧式銅剣が存在していたために、後世にまで剣崇拜が続いていたとみるべきであろう。剣のほかに矛が見られるのも、剣同様に早くから遼寧式銅矛が存在し、剣と同様に崇拜の対象であったからである。

こうした朝鮮半島の剣崇拜の影響が認められるのが、北部九州から四国の地域の有柄式磨製石剣の分布圏であり、弥生時代前期前半に、遼寧式銅剣の影響で成立した大陸系の有柄式磨製石剣が存在し、早くから朝鮮半島系の剣の文化の影響を受けていた。こ

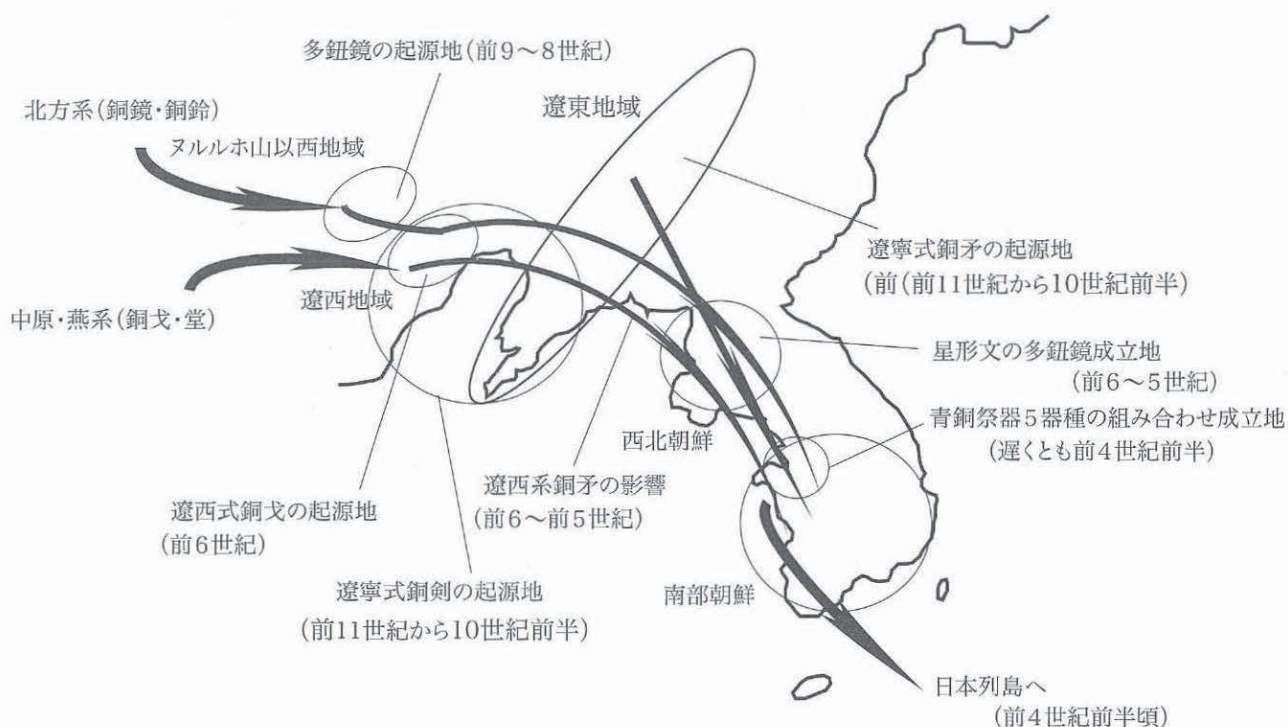


図7 遼寧青銅器文化における弥生青銅祭器5器種の起源地と展開

うした地域において、銅剣・銅矛を特別視する背景となった理由は、弥生時代前期の朝鮮半島から渡来した剣崇拜の影響がその後にも及んだからであろう。

ところで、中村豊は、こうした有柄式磨製石剣の分布に対して、近畿地方では粗製大形石棒が分布し、両者が対峙関係にある点を指摘した（中村 2004）。剣が元々蛇の象徴であり、さらに男根の象徴ともなっており、男性性格であったとすれば、中村の指摘する石棒との対立関係も同じ男性のシンボル同士の対立関係ということになる。また、この問題に関連して、難波洋三は、この中村豊説を受けて、さらに粗製大形石棒の分布と初期の銅鐸の分布が重なる点を指摘した（難波 2004）。こうした現象をどうみれば、近畿の弥生社会の形成を考える上で重要であるが、象徴考古学的な観点からみればこれらは関連した現象であると考えられる。すなわち、銅鐸は「辟邪」としての性格をもち（三品 1968）、絵画には、自然に打ち勝つ人間の優位性、女性に対する男性優位、といった点が象徴化されている（安藤 2006・小林 2007 ほか）。このような点から、銅鐸は男性性格であると想定し、剣や石棒と意味の上で相同関係にあると考えることも決して無理な推測ではないであろう。

次に、弥生時代前期末から中期初頭に相当する第 2 段階については、遼西地域で形成された銅戈・多鈕鏡・銅鈴が、朝鮮半島を経て、日本列島に流入する段階である。遼西地域は、先に触れたように、前 6 世紀頃から燕の間接支配を受け、その影響が器物にも及んでいる。特に銅戈については、本来、遼寧式銅剣文化圏には存在しない武器であり、形態は在地的であるが、武器としてのベースは燕の影響を受けていると考えたほうがよいであろう。北部九州を中心に剣・矛・戈が多少の時間差はあってもほぼ同時に流入し、特に中原系の影響のある銅戈の埋納も多く、この点で朝鮮半島との差異が生じたと考える。銅戈の祭祀における取り扱い方については、朝鮮半島経由ではあっても、遼西にまで及んだ燕化の影響が日本列島にまで到達するような状況が根底にはあったと考える必要がある。先に銅矛の節帯と耳環の要素を、遼西地域から受容したと想定した点も、同様な背景のもとに生じた可能性を考えたい。

しかし、北部九州から四国の地域では、前段階における剣と矛を重要視する伝統は根強く、剣・矛が

重要な崇拜対象となった。一方、最近、長野県中野市柳沢遺跡で銅鐸 1 個と銅戈 7 本の埋納が発見されたように、近畿以東では、銅鐸と銅戈が中心となり異なる様相をなす。銅戈は群馬県にまで拡散しており、銅戈自体が特別な意味をもっていたことを示している（小林 2006）。銅戈は朝鮮半島での出現とほぼ同時に日本列島に到達した可能性が高く（小林 2008b）、中原に起源する燕系の祭祀的意味が、遼西を介して比較的早く朝鮮半島で変容せずに日本列島に伝播したと考える。

以上、弥生青銅祭器 5 器種の起源の分析から、いくつかの問題を検討してきた。起源地から先の系譜問題、そして朝鮮半島における変遷過程などの検討により、さらに詳細な議論に進むと考える。

なお、本稿は、2008 年 3 月 1 日に國學院大學で実施されたフォーラムでの発表資料に、その後の知見を若干追加して修正したものである。

主要引用参考文献

- 安藤広道 2006 「弥生時代「絵画」の構造」（設楽博己編）『原始絵画の研究』論考編、六一書房
- 岩永省三 1983 「多鈕細文鏡再考」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 30 周年記念論文集、同朋舎
- 宇野隆夫 1977 「多鈕鏡の検討」『史林』第 60 巻第 1 号
- 大貫静夫 1999 『東北アジアの考古学』同成社
- 大貫静夫 2007 『遼寧を中心とする東北アジア古代史の再構成』東京大学大学院
- 岡内眞三 2004 「朝鮮半島からの視点」『季刊考古学』第 88 号
- 新 楓毅 1983 「朝陽地区発現的劍柄端加重器及其相關遺物」『考古』1983 年 2 期
- 甲元眞之 2006 『東北アジアの青銅器文化』同成社
- 後藤 直 2007 「朝鮮半島の銅戈」『遼寧を中心とする東北アジア古代史の再構成』東京大学大学院
- 小林青樹 2006a 「韓国支石墓における磨製石剣岩刻画」『原始絵画の研究』六一書店
- 小林青樹 2006b 「弥生祭祀における戈とその源流」『栃木史学』第 20 号
- 小林青樹 2006c 「中国外郭圏の銅戈」『古代アジアの青銅器文化と社会』国立歴史民俗博物館
- 小林青樹 2007a 「縄文社会の変容と弥生社会の形成」『考古学研究』第 54 巻第 2 号
- 小林青樹 2007b 「弥生人の心象風景—絵画からみた景観・集落・祭場—」『栃木史学』第 21 号
- 小林青樹 2008a 「東北アジアの銅戈の起源」『弥生時代の はじまり』第 3 巻、雄山閣
- 小林青樹 2008b 「遼寧式銅剣の起源に関する諸問題」『中国考古学』第 8 号

- 小林青樹 2008c 「中国北方地域における蛇形意匠の起源と系譜」『2008 年度日本中国考古学会金沢大会資料集』
- 小林青樹・石川岳彦・宮本一夫・春成秀爾 2006 「遼西式銅戈と朝鮮式銅戈の起源」『中国考古学』第 7 号
- 近藤喬一 1969 「朝鮮・日本における初期金属器文化の系譜と展開」『史林』第 52 巻第 1 号
- 設楽博己・小林青樹 2007 「板付 I 式土器成立における亀ヶ岡系土器の影響」『弥生時代のはじまり』第 2 巻、国立歴史民俗博物館
- 塔 拉 2006 「小黒石溝遺跡と出土の青銅器」『古代アジアの青銅器文化と社会』国立歴史民俗博物館
- 内蒙古文物考古研究所・韓国東北亜細亜歴史財団 2007 『夏家店上層文化的青銅器』中韓共同学術調査報告書 2
- 中村豊 2004 「結晶片岩製石棒と有柄式磨製石剣」『季刊考古学』第 86 号、雄山閣
- 難波洋三 2004 「銅鐸と銅鐸祭祀の変遷」『國學院大學 21COE 考古学・神道ミニ・シンポジウム 日本列島における青銅器祭祀』
- 春成秀爾 1994 「銅鐸の起源と年代」『論争と考古学』市民の考古学 I、名著出版
- 春成秀爾 1996 「性象徴の考古学」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 66 集、国立歴史民俗博物館
- 春成秀爾 2002 「銅鐸と社会」『古代を考える 稲・金属・戦争—弥生—』吉川弘文館
- 春成秀爾 2008 「銅鐸の系譜」『弥生時代のはじまり』第 3 巻、雄山閣
- 春成秀爾・宮本一夫・小林青樹・石川岳彦 「遼寧式銅剣の起源と年代」『中国考古学』第 7 号
- 三品彰英 1968 「銅鐸小考」『朝鮮学報』49
- 宮里 修 2001 「多鈕粗文鏡について」『史観』第 144 冊
- 宮里 修 2007a 「朝鮮式細形銅剣の成立過程再考—東北アジア琵琶形銅剣の展開のなかで—」『中国シルクロードの変遷』アジア地域文化学叢書 VII、雄山閣
- 宮里 修 2007b 「細形銅剣文化の暦年代」『第 19 回東アジア古代史・考古学研究交流会予稿集』
- 宮本一夫 2000 『中国古代北疆史の考古学的研究』中国書店
- 宮本一夫 2002a 「朝鮮半島における遼寧式銅剣の展開」『韓半島考古学論叢』すずさわ書店
- 宮本一夫 2002b 「吉長地区における青銅武器の変遷と地域的特徴」『東北アジアにおける先史文化の比較考古学的研究』九州大学大学院人文科学研究院
- 宮本一夫 2006 「長城地帯の青銅器文化」『古代アジアの青銅器文化と社会』国立歴史民俗博物館
- 宮本一夫 2002 「漢と匈奴の国家形成と周辺地域—農耕社会と遊牧社会の成立—」『東アジアと日本—交流と変容— 統括ワークショップ報告書』九州大学 21 世紀 COE プログラム
- 宮本一夫 2008 「細形銅剣と細形銅矛の成立年代」『弥生時代のはじまり』第 3 巻、雄山閣
- 吉田 広 2001 『弥生時代の武器形青銅器』考古学資料集 21
- 吉田 広 2008 「日本列島における武器形青銅器の鑄造年代」『弥生時代のはじまり』第 3 巻、雄山閣
- 項春松・李又 1995 「寧城小黒石溝石槨墓調査清理報告」『文物』1995 年 5 期